

発話行為（Speech Acts）にあらわれる言語文化

——日本語母語話者の特徴——

Lee 風子

1. はじめに

1960年代から70年代にかけて、イギリスの哲学者オースティンによって提唱された発話行為理論（Speech Act Theory）は、真理条件が言語理解にとって中心的な位置を占めるものであるとするそれまでの言語観を打ち砕いた。オースティンは、まず最初に、日常言語の平叙文の中には、論理実証主義者の仮定に反し、明らかに真か偽かの陳述をする意図なしに使用されているものがあることを示した。例えば、I object. I apologize. などという文は、単に何かを言うため、何らかの事態を記述するために用いられるというよりも、むしろ、積極的にものごとを行うために用いられるという点に特異性があると主張した（Austin, 1962）。哲学の分野に端を発したこの発話行為理論は他の関連分野にも広く関心呼び起こした。例えば、文芸批評家たちは文芸作品のジャンルの本質に対する理解が発話行為理論によって助けられることを（Ohmann, 1971, Schaubert & Spolsky, 1986）、文化人類学者たちはこれが異なる文化を背景に持つ人間の異なる言語行動を説明する手掛かりとなることを（Hymes, 1974, Gumperz, 1982）期待し、言語学者たちはこれが統語論や意味論の問題（Sadock, 1974, Fillmore 1971）、そしてさらに、第一言語習得（Ervin-Tripp & Mitchell-Kernan, 1977）や第二言語習得（Schmidt & Richards, 1980）の過程における人間のインターアクション能力発達の解明に役立つとしている。本質的に諸分野にまたがる性格を持つ異文化間コミュニケーションに関する研究分野では、この発話行為理論が理論面でも実践面でも貢献している。同じ言語を話す人間と人間の間における伝達の場合でも、例えば、ほのめかし、誘導尋問、さぐりなどは正しく理解されないことがある。ましてや、異なる文化、言語を背景に持つ人間がコミュニケーションを行う際には、さらなる誤解が生じて不思議ではない。丁寧表現の構造のように、根底の用法上の普遍性があるとされる場合でさえも（Brown & Levinson, 1978）異文化間における誤解が生ずる可能性がかなりある。例えば、ドイツ人の話し手は依頼や苦情を述べる際、イギリス人の話し手よりもずっと直接的であり、失礼なように思われると報告されている（House & Kasper, 1981）。

このような背景のもと、発話行為は、普遍的な側面よりむしろ文化によって異なったあらわれかたをするのではないかという見方が強くなり、様々な発話行為を対象に、異なる言語文化でのあらわれ方を実証的に数字で出す研究が多々発表されるに至った。その先駆的存在である Cross-Cultural Speech Act Realization Project (CCSARP) は、10から14にわたる言語が母語話

者や非母語話者に使用される際に、「依頼」と「謝罪」の発話行為がどのように行われるかを調査した大掛かりな一連の研究であった (Blum-Kulka and Olshtain, 1984, Blum-Kulka et al. 1989)。

このような語用論研究は、大きく (1) 対照言語研究 (Contrastive Pragmatics) と (2) 中間言語研究 (Interlanguage Pragmatics) に分けられる。本稿では、それぞれの研究の中でも日・英語での「断り」の発話行為に関する主なものをまず紹介してから、同じテーマで筆者が行った調査結果を報告し、その考察を試みたいと思う。

2. 先行研究

2-1 語用論レベルでの対照言語研究 (Contrastive Pragmatics)

これは、まず各言語の母語話者が発話行為においてどのような言語行動をとるかを観察した上で、それを複数の言語間で比較・対照し、異なる点と共通する点を明らかにするものである。日本語と英語を対象としている研究は多々あるが、その中でも、ここでは「断り」の発話行為に焦点をあてたものを紹介する。

2-1-1 橋元 (1992)

これは、間接的に発話行為が遂行されることの多い「依頼」「依頼に対する拒否」「注意」「謝罪」「いいにくい事実の陳述」の5種類の発話行為、6場面を設定し、相手に応じてどのような表現でこれらが遂行されるかを談話完成テストを用いて調査したものである。対象言語としては、日本語と英語を含む9カ国語であった。多くの観察がなされているが、ここでは日・英語における「依頼に対する拒否」に関するものだけを紹介しておく。これは、「知り合いからチケット購入の依頼を受けるが、金銭的事情で断りたいと考えている」という場面設定であったが、他の発話行為 (例えば、間接的な達成手段において、ヴァリエーションが多彩で言語による方略の差も顕著な「依頼」「注意」「謝罪」と比べて、言語による差が少なかったと報告されている。橋元はこれを相手の負担するコストが大きいほど、また相手に強いる将来の行動変容の程度が大きいほど、方略は多彩に、複雑になると説明している。日本語に関して言えば、方略のヴァリエーションとして豊富な言語ではなく、日本語に独自の表現方略も出現しなかったと報告している。また、日本語を含む東洋系言語 (中国語を除く) では、どちらかといえば社会的地位の高低によって間接方略を使い分け、欧米文化圏では親疎によって方略の使い分けが行われやすいという傾向を指摘している。

2-1-2 笹川 (1994)

これは、上記の橋元と同じ調査のデータをブラウンとレビンソンの「丁寧さのルール」に照らし合わせて解釈したものである。笹川によると、「断り」は、聞き手の積極的なフェイスを脅かす行為に関するものである。Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990) で日本語の特性とされた、断るための「代替案の提示」は今回の調査でも日本語の主要方略として多く付加されている (18.2%)。「相手への共感の方略」は英語 (15.9%) はブルガリア語 (20.9%) について、2番目に

多く見られたが、日本語（5%）は少なかったと報告している。断るための「消極的な丁寧さの方略」も、「慣習的理由の方略」が中国語（27.6%）について、日本語（25.4%）、英語（23.5%）の順で見られたり、「謝りの方略」が各言語とも多く見られたりなど、日・英語の大きな差は見られなかった。

2-2 語用論レベルでの中間言語研究（Interlanguage Pragmatics）

これは、自分の母語でない言語を使用する際、つまり第一言語と第二言語の間にある中間言語において人間がどのような言語行動をとるかを観察し、その中での普遍性をもとめたり、第一言語からのトランスファー（転移）をさぐったりする研究である。

2-2-1 Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990)

これは、要請、招待、申し出、提案に対する断りの発話行為を調査するために、それぞれ相手が目上の場合、目下の場合、同じくらいの社会的地位にある者の場合の12の場面に分けた談話完成テスト（Discourse Completion Test）を用いて、日本人の英語学習者グループ（JE）、日本語の母語話者グループ（JJ）、アメリカ英語の母語話者グループ（AE）から収集したデータを分析したものである。ここでは、断り行為を行う発話を構成する意味公式（semantic formula）があらわれる順序や頻度において、日本語から英語へのプラグマティック・トランスファーが起こっていることが観察されている。主な例としては、(1)目上の要請に対する断りとしては、AEはまず前向き意見を述べてから、謝罪、断りの理由という順序をふむのに対して、JJとJEのグループは、前向き意見無しにすぐ、謝罪、そして断りの理由という順序を取っている。(2)目下の要請に対する断りの順序としては、JJとJEは相手への共感や積極的な意見→理由であるのに対し、AEは無共感（そのかわりに前向き意見）→遺憾の意の表明→理由→「できない」という言語表明の順であった。(3)JJとJEは招待や申し出に対する断りで代替案提示が目立ったのに、AEはそれが無かった、などが挙げられる。一般的に、日本人は相手が自分より地位が上であるかその逆であるかに関して敏感であるが、アメリカ人は自分と地位が同じであるかそうでないかによって異なった言語行為を取っていると報告されている。

後に紹介する筆者の調査も日本語から英語へのトランスファーを観察したものであるが、そのデータには、日本語母語話者が断りの発話行為において代替案を提供するという傾向は見られなかった。もっとも、この調査は招待や申し出ではなく、要請に対する断りの場面に焦点をあてたものなので、このような結果のくい違いが生じたとも考えられる。

2-2-2 生駒・志村 (1993)

これは、上記のBeebe, Takahashi, and Uliss-Weltz (1990)の12の場面の談話完成テストを用いて、アメリカ人の日本語学習者グループ（AJ）、日本語の母語話者グループ（JJ）、アメリカ英語の母語話者グループ（AE）を被験者にした調査で、AJは(1)要請に対する断りにおいて代替案をあまり提供しない、(2)友達に勧められた食べ物を断る際に「結構です」を多用する、(3)話し相手の地位によって中途終了文の使用頻度をあまり変えることなく、直接的な断りを多用する、などの英語から日本語へのプラグマティック・トランスファーが観察されたことを報告している。

後に紹介する筆者の調査は、日本語から英語へのトランスファーを観察したものであるが、そのデータには、要請に対する断りで日本語母語話者が代替案を提供するという傾向は見られなかった。

2-2-3 熊井 (1992)

これは、静岡大学在籍のアジア系留学生14名と日本人学生5名を対象にロールプレイを用いて行った「依頼」と「断り」の発話行為に関する調査である。留学生が日本人と異なっている点が「留学生の談話行動上の問題点」として報告されているが、ここでは「断り」の発話行為に関するもののみ紹介する。

- (ア) 留学生用のガイドブック作成協力を断るという場面で、日本人の場合は「ああ、そうですか」や「はい」のみで、いきなり断り表現にいく場合が多かったのに対し、留学生の場合には、それぞれの相手に対し、約半数の者が、作業の時期やかかる時間、あるいはガイドブックの内容や翻訳する言語についての情報要求を行っている。
- (イ) 日本人、留学生とも断り行動に2, 3回の理由説明が多く含まれているのだが、日本人の場合は前に挙げた理由を具体化するか、ことばを変えたり強めたりして繰り返して、自分から理由を変えた者は一名もいなかった。ところが、留学生の場合は途中で別の理由に変わっている者が少なからずいた。
- (ウ) 「ガイドブックの翻訳は不要で日本語だけでいい」というような批判的な意見が留学生のみに見られた。
- (エ) 少数の日本人に対し、半数前後の留学生が「他の人に頼む」という代替案提示を選択している。
- (オ) 8割前後の日本人の発話が言い差しであるのに対し、留学生は多くても3割で、すべての相手に対し、言い切りの文が多い。

このように、日本人は断定的な表現を避け、表現をソフトにしたり、理由説明を繰り返すことによって相手に事情をわかってもらおうとする行動を選択しているのに対し、留学生は情報要求や代替案提示によって会話をリードし、相手に積極的にはたらかかけたり、批判あるいは理由説明の内容を変えることによって、相手を説得しようとする姿勢が強いと報告されている。

後に紹介する筆者の調査2でも、日本の大学に在籍するアジア系留学生の回答が得られたが、そのデータには、留学生の方が情報要求をするという傾向は見られなかった。熊井の「留学生ガイドブックの作成協力の依頼を断る」という場面と、筆者の「上司に残業を頼まれるが断る」、「クラスメートに講義ノートを貸すよう頼まれるが断る」という場面の違いが結果の違いを引き起こしたとも考えられる。

3. 「断り」の発話行為に関する調査1

3-1 調査目的, 対象, 方法

「断り」の発話行為に関する調査1は1997年1月に実施した。調査の目的は、1996・97年度に

筆者が担当した UBC ジョイントプログラムの中の異文化間コミュニケーションというコースで紹介した Beebe et. al. (1990) の研究結果が、やはり英語母語話者と英語を使用する日本語母語話者が共に学ぶこのコースで再現できるかどうかを確かめる事であった。よって、調査の対象はそのコースを受講した立命館の学生96名と英語をはじめ様々な言語背景をもつ UBC の学生53名であったが、実際データとなりうるものは以下の通りであった。

日本語母語話者による日本語での回答 (JJ) 23

日本語母語話者による英語での回答 (JE) 47

英語母語話者による英語での回答 (EE) 35

データ収集法:

調査の対象となった学生に、下記の場面でどのような会話をするかを書かせる談話完成テストの方法を用いた。ただ、Beebe et. al. (1990) と異なり、会話の出だしも終わりも回答者に自由に書いてもらった。その際、依頼をする者とその依頼を断る者との会話を記入させるため6行の空欄を設けた。つまり、依頼をする者とその依頼を断る者がそれぞれ交替で3度づつ発話できる形になっている。

場面1 部下が上司に残業を頼まれるが断る。

場面2 学生がクラスメートに講義ノートを貸してほしいと頼まれるが断る。

場面3 教師が学生に授業内容を変更してほしいと頼まれるが断る。

3-2 調査結果

3-2-1 観察1

場面1と場面2において、日本語母語話者は断り行為に疑問文の形を使う傾向が認められた。これは、日本語を使用する時にも英語を使用する時にも見られた。以下はその例である。

例(場面1)

JJ

- (1) 上司: 悪いけど、今晚残業してくれない?
部下: え、今晚ですか。
- (2) 上司: 少し仕事をやってほしいんだけど…
部下: 急ぎの仕事ですか。

JE

- (3) Boss: Could you work late tonight?
Employee: Oh, do we have much work left?
- (4) Boss: Will you stay longer tonight?
Employee: Oh, me?

これを(5)のEEの典型的な回答例と比較すると違いが明らかになる。

EE

- (5) Boss: Sally, could you work late tonight?
Employee: Well, normally I would be happy to but my husband and I are going out to dinner.

表 1 は場面 1 で観察された疑問文の数とそれが回答数に占める割合を示したものである。

表 1 : 場面 1 で観察された疑問文の数

	回答者数	疑問文の数 (%)
JJ	23	12 (52%)
JE	47	11 (23%)
EE	35	2 (06%)

JJ の 52%, JE の 23% は EE の 6% と比べて、統計的にも有意差が認められ、JE が EE と JJ の中間値を占めるという点で、プラグマティック・トランスファーの基準にかなっている。つまり、日本語母語話者は「部下 (目下) が上司 (目上) に残業を頼まれたが断る」という場面で疑問文を用いる傾向があり (52%), それは英語を使用する時にも認められ (23%), 母国語の語用レベルでの言語行為が第二言語を使用する時にもトランスファー (転移) している現象である。これは、目上でも目下でもない同等の二者が関わる場面 2 でも観察された。以下はその例である。例 (場面 2)

JJ

(6) A : 講義のノート貸して。

B : どうして?

(7) A : ごめん, ノート貸してくれるかな。

B : え, 授業休んだの?

JE

(8) A : Can I borrow your notes?

B : My notes? Did you absent the lectures?

(9) A : Please lend me today's note.

B : Why?

これを (10) の EE の典型的な回答例と比較すると違いが明らかになる。

EE

(10) A : Could I borrow your notes from last class?

B : No, I don't think so.

表 2 は場面 2 で観察された疑問文の数とそれが回答数に占める割合を示したものである。

表 2 : 場面 2 で観察された疑問文の数

	回答者数	疑問文の数 (%)
JJ	23	10 (43%)
JE	47	16 (34%)
EE	35	2 (11%)

JJ の 43%, JE の 34% は EE の 11% と比べて、統計的にも有意差が認められ、JE が EE と JJ の中間値を占めるという点で、プラグマティック・トランスファーの基準にかなっている。つま

り、日本語母語話者は「学生がクラスメートに講義ノートを貸してほしいと頼まれたが断る」という場面でも疑問文を用いる傾向があり（43%）、それは英語を使用する時にも認められる（34%）。これは、場面1と同様、母語の語用レベルでの言語行為が第二言語を使用する時にトランスファー（転移）している現象である。

では、「教師が学生に授業内容を変更してほしいと頼まれるが断る」という場面3はどうであろうか。ここでは、日本語で回答した日本語母語話者（JJ）、英語で回答した日本語母語話者（JE）、英語で回答した英語母語話者（EE）のどのグループにも疑問文を使用する傾向は見られなかった。目上が目下に断るという点で、いわゆる face threatening act¹⁾ではなく、教師が学生に対する断り方というのは日・英語で大差が無いという認識を得たが、異なる場面で再度調査をすべき項目である。後述の調査2の被験者となった韓国語母語話者は、そもそも学生はこのような事を教師に要請しないものだと言っていた。談話完成テストに用いる場面を選択する段階から被験者の言語文化に対する配慮が必要となってくる事を示す良い例である。

3-2-2 談話の展開の中における疑問文の位置

以上、断りの発話行為において日本語母語話者が疑問文を使用する傾向が量的に認められた。そこで次に、全体の談話の展開において、つまり、依頼をする者、依頼を断る者がそれぞれ3回づつ発話をするにあたって、どのように疑問文があらわれているのかを調べてみた。その結果、次のようなことが明らかになった。

(ア) EE のデータでは、下の例 (11) から (13) のように、まず冒頭から依頼者が依頼行為を行い（場面1で86%、場面2で82%）、それを受けて断る側が“Sorry”や“No”に続く断りの理由などで「断り」の行為を行い（場面1で83%、場面2で69%）、その後、依頼者が再度依頼を試みるというパターンが多かった。

(11) EE 場面1

Boss : Could you please work late tonight ? We are short-staffed and very busy.

Employee : Sorry I can't, I have plans for tonight.

Boss : I'm really stuck and I really need your help.

Employee : Sorry, I really can't stay.

Boss : Could you help me find someone else ?

Employee : Sure, I can help.

(12) EE 場面2

A : Excuse me, but could I borrow your notes from today ?

B : I'm sorry, but I can't lend them.

A : Any particular reason why not ?

B : I just have my reasons.

A : Okay, thanks.

(13) EE 場面2

A : Hi, Clare, I was away last class and I was wondering if I could borrow your notes.

B : Oh well, I need them to study, sorry.

A : Oh, then, I'll go photocopy them.

B : I don't want to lend them out. I'm afraid I'll lose them.

A : I promise I won't lose them.

B : Sorry, but I can't.

(イ) JJ および JE のデータでも EE と同様、冒頭で依頼者が依頼行為を行っているものがほとんどである (場面1で JJ が76%, JE が77%, 場面2では JJ が78%, JE が80%) が、断る側は、即、「断り」の行為に入る者が EE より少なく (場面1で JJ が58%, JE が63%, 場面2では JJ が40%, JE が47%), 下の例 (14) から (17) の下線部に示したように、断る側が疑問文を用いて何らかの情報要求を行っているのが目立つ。その後は、依頼者が疑問文の内容に答える形で談話が展開している。

(14) JJ 場面 1

上司 : ちょっと残業たのむよ。

部下 : 今日ですか？

上司 : ああ、ちょっと急ぎの仕事なんだ。

部下 : しかし、今日はちょっとこれから約束がありまして。

上司 : 約束ったってそんなに仕事より大切なものなのか。

部下 : ええ。

(15) JE 場面 1

Boss : Could you work late tonight ?

Employee : Oh, do we have much work left ?

Boss : Yes, and there are not many people today.

Employee : I would like to but ...

Boss : Do you have an appointment tonight ?

Employee : Yes, I'm sorry.

(16) JJ 場面 2

A : 講義のノートをかして。

B : どうして？

A : 講義にぜんぜん出なかったから。

B : 私、ちゃんとノートとれてないから...

A : いいよ、気にしないから、かして。

B : 他の人に言っって。

(17) JE 場面 2

A : Can I borrow your notes ?

B : Why ?

A : I can't understand my notes.

B : I don't have a perfect note. I was absent.

A : OK, I see.

B : Sorry.

以上からもわかるように、談話完成テストで6行にまたがる会話の欄がもうけられている為、英語母語話者も日本語母語話者もそれだけの長さの談話の中で断りの発話行為を行わなければならない。このような同じ条件のもとにあるにもかかわらず、英語母語話者は疑問文を使用する量が日本語母語話者と比べて非常に少ない。では、なぜ日本語母語話者は疑問文を多用するのだろうか。これについては、第5節で考察を試みたい。

3-2-3 調査1で見られた他の観察

断りの発話行為に弁明が見られた点では、日本語母語話者も英語母語話者も相違が無いのであるが、前者の場合、「自分のノートは汚いから」というものが多く見られた。これに対して、英語母語話者にはこのような断りの弁明は観察されなかった。また、新しい観察ではないが、日本語母語話者による断りの発話行為で、特に場面1（上司に残業を頼まれるが断る）において「今晩はちょっと…」という言い差しが多く見られた。

4. 「断り」の発話行為に関する調査2

4-1 調査目的、対象、方法

「断り」の発話行為に関する調査2は1997年6月に実施した。目的は、調査1で観察されたこと——日本語母語話者は断りの場面で疑問文を使用する傾向があるが、英語母語話者はそうでない——が再現できるかどうかを確かめ、さらに日本語と英語以外の母語話者の場合はどういう結果が出るかを観察することであった。調査の対象は、主に立命館大学在学中の留学生で、調査1と同じ談話完成テストを施行した。収集できたデータは以下の通りである。

日本語母語話者による日本語での回答	1
英語母語話者による英語での回答	2
英語母語話者による日本語での回答	2
中国語母語話者による日本語での回答	17
韓国語母語話者による日本語での回答	4

4-2 調査結果

今回は、英語母語話者と日本語母語話者の数が少なかったため、調査1のような数量的比較はできなかったが、日本語母語話者は断りの場面において疑問文を使用する傾向があるという調査1の観察を、次のような点で確認できた。

- (ア) 今回、唯一の日本語母語話者であった学生の回答にも、やはり疑問文使用が見られた。
- (イ) 英語母語話者による英語での回答には、疑問文使用が見られなかった。
- (ウ) 英語母語話者による日本語での回答2件のうち1件につき、疑問文の使用が見られた。つまり、この回答者は、英語の断り場面では疑問文を使用せず、日本語の断り場面では疑問文

を使用するという使い分けをしており、彼にとっては非母語である日本語のプラグマティック・コンピテンスを習得している例であると考えられる。

(エ) 中国語、韓国語母語話者の回答には、疑問文の使用はわずか(場面1で3名、場面2で2名)しかみられなかった。

5. 疑問文について

なぜ日本語母語話者は断りの発話行為で疑問文を使用するのかという事を考える前に、他の発話行為に関する研究で報告されている関連現象について触れておく。第2節で紹介した日・英語における「断り」の発話行為の先行研究では、筆者が観察した日本語母語話者による疑問文の多用という現象は述べられていない。しかしながら、他の発話行為に関する調査で、それも特に「不同意表明行為」や「不満表明行為」など相手の face²⁾を脅かす行為を行わなければいけない場面で日本語母語話者が疑問文を使う傾向があることが、断片的ではあるが、言及されている。以下、それらを簡単に紹介する。

5-1 Beebe and Takahashi (1989)

この論文では、「相手の言うことに不同意の意を示す」という発話行為を行う際に、日本語母語話者が疑問文を使用するという現象が観察されている。これは、ある研究プロジェクトで雇われた日本人学生が、雇い主のアメリカ人教授に自らの誤りを気付かせるために、純粋な質問意図の無い疑問文を使用したというもので、その疑問文に答えるため、結局は4度にもわたって内容を繰り返さなければならなかった、またその過程ではじめて自分の間違いに気付かせられることになったアメリカ人教授が気分を害したエピソードとして記録されている。

5-2 Takahashi and Beebe (1993)

この論文の焦点である「誤りを正す」という発話行為では、英語母語話者も日本語母語話者も、いくつかある方略の中に“Isn't it X who said Y?”と疑問文を使うことが挙げられているのだが、ある日本語母語話者による英語での返答に、“Would you please tell me who made this statement again?”というものがあり、答えがわかっているにもかかわらず疑問文を使用するという点で英語母語話者と異なることが指摘されている。このような疑問文使用は、いわゆる“face-threatening speech acts”である「警告する」、「不同意の意を表す」、「誤りを正す」などといった発話行為で日本語母語話者にたびたび観察される現象であると述べられている。

5-3 熊井 (1992)

第2節で紹介した熊井の研究では、「情報要求」という形で、アジア系留学生の方が日本人学生より、断りの場面で多くの疑問文を使用すると報告されている。残念ながら、熊井には統計的有意さの表示は示されていない。しかし、いずれにせよ、これは筆者の調査2と相反する結果である。熊井の「留学生ガイドブックの作成協力の依頼を断る」という場面と、筆者の「上司に残

業を頼まれるが断る」, 「クラスメートに講義ノートを貸すよう頼まれるが断る」という場面の違いが結果の違いを引き起こしたとも考えられるが, アジア系留学生と日本人学生の詳細な比較は筆者の今後の研究課題である。

5-4 初鹿野・熊取谷・藤森（1996）

これは, 不満表明行為における日本語母語話者と日本語学習者（英語, 中国語, インドネシア語, タイ語母語話者等）との比較を行った調査である。ここでも, 「好ましくない状況が生じた原因・理由, またはその状況が生じた過程を問う」ために疑問文を用いるストラテジーは日本語母語話者に見られる特徴であると報告されている。

5-5 なぜ, 疑問文なのか

単に疑問文といっても, 場面によってその発語行為（locutionary act）および発語内行為（illocutionary act³⁾）は次のように様々である。

発語行為	発語内行為
「どうしてもっとちゃんと勉強しないの。」	母親の子どもに対しての非難, 叱責
「少し, 寒くない?」	ヒーターをいれてほしいという依頼
「あなたならいやじゃない?」	何かいやなことを友人に頼まれての断り

調査1で観察された疑問文の内容を分類してみると次のような結果が得られる。

表3 断りの発語行為で用いられた疑問文の内容と頻度

	場面1の頻度			場面2の頻度		
	JJ	JE	EE	JJ	JE	EE
(a) 相手（依頼者）の発話の部分的くり返し・言い直し	4	2	0	0	1	0
(b) 情報要求	3	5	0	1	0	0
(c) 義務遂行の必要性に関する質問	1	2	1	0	0	0
(d) 代替案に関する質問	1	1	0	0	0	1
(e) 理由要求	1	0	1	2	9	2
(f) 相手に関する質問	0	0	0	7	6	1
(g) その他	2	1	0	0	0	0

例

(a) 相手（依頼者）の発話の部分的くり返し・言い直し

上司：悪いけど, 今晚残業してくれない?

部下：え, 今晚ですか。

(b) 情報要求

上司：少し仕事をやってほしいんだけど…

部下：急ぎの仕事ですか。

(c) 義務遂行の必要性に関する質問

上司：残業してくれないか。

部下：どうしてもですか。

(d) 代替案に関する質問

上司：計画書をあしたまでに仕上げなくちゃいけないんだけど…

部下：あすの朝ではいけないんでしょうか。

(e) 理由要求

A：講義のノート貸して。

B：どうして？

(f) 相手に関する質問

A：ごめん、ちょっとノート貸してもらえる？

B：自分のノートはどうしたの？

当然の事ながら、場面1（目下が目上に断る場面）と場面2（同等レベルの者に断る場面）では、同じ断りのための方略でもその質が異なる。上の表3でわかるように、場面1では「相手の発話の部分的くり返し・言い直し」と「情報要求」が多く、場面2では「理由要求」と「相手に関する質問」が目立つ。場面1の「相手の発話の部分的くり返し・言い直し」は突然頼まれた（と想定をする）驚きゆえの現象かもしれない。「情報要求」が多いのは、断りを正当化する理由をさがすためであると、テスト後のインタビューで確認が取れたものもある。場面2で目立った「相手に関する質問」の多くは「授業に出なかったの？」のように「非難」の発語内行為が疑問文の形であられたものである。また、やはり多くが観察された「なぜ（ノートを貸してほしいの）？」というの、このように「理由要求」をすることによって次の段階で相手の非を認めさせるに至るわけで、「相手に関する質問」と「理由要求」の二つは発語内行為としては「非難」という大きな範疇にまとめられるかもしれない。

なお、代替案に関する質問は、上に挙げた例(d)のように、代替案提示の方略が疑問文の形であられたものである。これはJJ、JEそれぞれ一件づつしか観察されず、先の2-2-1節でも述べたように、Beebe, et. al. (1990)の結果とは異なっている。

このように、日本語母語話者は断りの行為を行うにあたって断りの直接的表現を避け、疑問文の形を用いて断る理由を探したり相手を非難したりするという方略を使っているようである。確かに、疑問文を用いることは即、Noと断るより間接的であるかもしれないが、それが必ずしも丁寧さにつながるとは限らない。間接的であると誰もが認める「ほのめかし」が丁寧さに結び付かない例も指摘されている (Blum-Kulka, 1987)。日本語母語話者が疑問文を用いて断りの行為を行う現象が、ブラウンとレビンソン (Brown & Levinson, 1978, 1987) などの丁寧さの理論で説明できるかどうかについては今後の研究課題である。

6. 調査の方法について

今回の調査は、6行の空欄をもうけた談話完成テスト、いわば筆記式ロールプレイであり、プロンプトがもうけられそれに対する反応を1行のみ書き入れる談話完成テストと比べて、談話の展開まで観察できるものであったのだが、それでも自然に起こる会話と比べると不自然であると

いう批判がある。それゆえ、筆者は、日本人学生2人のペア5組に口頭によるロールプレイをしてもらい、それを録音する調査3（1997年10月実施）を行った。この結果は、Beebe and Cummings（1985）の調査の結果——口頭で得られるデータの方が筆記によるデータより詳細である——とは異なるものであった。むしろ、やはり疑問文を使用するペアが5組中2組観察されたという点で、Rintell and Mitchell（1989）の調査の結果——口頭ロールプレイで得られたデータと筆記談話完成テストで得られたデータは非常に似通っていた——に近いものであった。

7. お わ り に

日本人は婉曲的表現を好み、はっきりものを言わないということで、留学生がとまどったり、気分を害したりするケースが多々報告されている（笹川 1996）。今回の調査で統計的にも明らかになった日本語母語話者の特徴——断り場面で疑問文を使用するという行為——は、即、Sorry I cannot などと断る英語母語話者との比較において間接的であると言える。だが、それが丁寧かどうかというのを受け取る側の言語文化とも関る問題になってくる。

客観的に言語を観察、分析する言語学の貢献で、語彙以外、つまり音声や文法そのものには文化があらわれるという考えはなくなった。しかし、語用論のレベルでは、普遍性の追求と同時に文化に関連した個別性も見直されてきている。「断り」以外の発話行為でもさまざまな結果が報告されている。文化により異なる、または同様のあらわれ方をする発話行為の研究が今後さらに進むとともに、それらの発話行為の背後にあると思われる人間としての普遍性も明らかになっていくことを期待する。

謝辞

本稿は、1997年7月の Japanese Studies Association of Australia の学会、および、1997年10月の立命館大学言語文化研究所プロジェクト BII 研究会で発表した内容に加筆・修正を行ったものである。児玉徳美教授、内木場務助教授をはじめ、筆者の発表に参加し貴重なコメントを下された方々、および、データ収集に協力して下さった方々に感謝の意を表したい。なお、あくまでも、本稿の内容に関しては、筆者が責任を負うものである。

注

- 1) face threatening act の基盤になっているのは、Goffman（1967）によって提示された face の概念である。face は、相手から自分の領域を侵害されることなく行動したいという自由の欲求である「消極的な face」と、自分の個性を相手に認めてもらいたいという欲求である「積極的な face」からなる。face threatening act とはこのような face を脅かす発話行為のことであるが、face の概念そのものが西洋的であるという批判もあり、一般的に言いにくいことを言わなければいけない場面での発話行為という意味で広く用いられることもある。
- 2) 上記、注1) 参照。
- 3) 発話行為の分析を提起した Austin によれば、発話と同時に遂行される行為は次の三種類に分類される。

発話行為 (locutionary act): これは、一定の意味と指示をもつ文を発することである。

発語内行為 (illocutionary act): これは、文を発することで、その文と結び付いている言語規約的

な力によって、陳述、約束、依頼等を行うことである。

発語媒介行為 (perlocutionary act): これは、問題となっている文を発することによって、発話の状況に特有な効果を聞き手に引き起こすことである。

参 考 文 献

- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79, pp. 41-49.
- 熊井浩子 (1992) 「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11, pp. 72-80.
- 笹川洋子 (1994) 「異文化間に見られる「丁寧さのルール」」『異文化間教育』8, pp. 44-58.
- (1996) 「異文化の視点からみた日本語の曖昧性」『日本語教育』89, pp. 52-63.
- 橋元良昭 (1992) 「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』11, pp. 92-101.
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向」『日本語教育』89, pp. 128-139.
- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things With Words*. Oxford: Clarendon Press.
- Beebe, L. & Cummings, M. C. (1985) Speech act performance: A function of the data collection procedure. Paper presented at the Fourteenth Annual TESOL and Sociolinguistics Colloquium. TESOL National Convention, Atlanta, April.
- Beebe, L. M. and Takahashi, T. (1989) "Do you have a bag?: Social status and patterned variation in second language acquisition" In S. Gass, C. Madden, D. Preston, L. Selinker (Eds.) *Variation in second language acquisition*. Clevedon & Philadelphia: Multilingual Matters Ltd.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990) "Pragmatic Transfer in ESL Refusals." In R. C. Scarcella, E. S. Andersen, & S. D. Krashen (Eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S. (1987) Indirectness and politeness in requests: Same or different? *Journal of pragmatics*, 11, pp131-146.
- Blum-Kulka, S. & Olshtain, E. (1984) Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, pp. 196-213.
- Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (Eds.) (1989) *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*. Norwood, NJ: Ablex.
- Brown, P. & Levinson, S. (1978) Universals in language usage: politeness phenomena. In E. Goody (Ed.) *Questions and Politeness: Strategies in Social Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ervin-Tripp, S. & Mitchell-Kernan, C. (Eds.) (1977) *Child Discourse*. New York: Academic Press.
- Fillmore, C. J. (1971) Verbs of judging: an exercise in semantic description. In C. J. Fillmore & D. T. Langendon (Eds.) *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Goffman, E. (1967) *Interactional ritual: essays on face to face behavior*. Garden City.
- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- House, J. & Kasper, G. (1981) Politeness markers in English and German. In F. Coulmas (Ed.) *Conversational Routine: Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. The Hague: Mouton.
- Hymes, D. (1974) *Foundations in Sociolinguistics: an Ethnographic Approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Ohmann, R. (1971) "Speech acts and the definition of literature." *Philosophy and Rhetoric*, 4, pp. 1-19.

- Rintell, E. M. & Mitchell, C. J. (1989) Studying requests and apologies : An inquiry into method. In S. Blum-Kulka, J. House, & G. Kasper (Eds.) *Cross-cultural pragmatics ; Requests and apologies*. Norwood, NJ : Ablex.
- Sadock, J. M. (1974) *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York : Academic Press.
- Schauber, E. & Spolsky, E. (1986) *Bounds of interpretation : Linguistic theory and literary text*. Palo Alto, CA : Stanford University Press.
- Schmidt, R. W., & Richards, J. C. (1980) Speech acts and second language learning. *Applied Linguistics*, 1 (2), pp. 129-157.
- Takahashi, T. and Beebe, L. M. (1993) "Cross-Linguistic Influence in the Speech Act of Correction" In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage Pragmatics*. New York : Oxford University Press.